

奨学終了報告書
(私が接して感じた中国)

山本 裕之
2024年8月

はじめに

中国は広く多様です。地域が違えば主食も違うし、生活習慣も異なります。それこそ言語(方言)も異なります。日本のメディアを通して見た中国はさらに政治的なバイアスがかかって、実際にそこで生活している人が見えてこないかもしれません。今回、サブタイトルに「私が接して感じた中国」と付けました。中国のことを「中国は、」という大きい主語で語ることはできません。以下報告するものは、中国のほんの一部、私が接し、私が感じた個人的な感想になります。

1. 60歳の留学生
2. 留学期間の時代背景と反日
3. 中国が日本に似ているのか、日本が中国に似ているのか。
4. 個人情報とDX(デジタルトランスフォーメーション)

1. 60歳の留学生

まず、60歳という年齢で中国に留学ができたことを、あらためて埼玉県および関係部署の方々、受け入れていただきました山西大学、先生方に感謝申し上げます。

留学と言えば若い方がやること。残念ながら一度仕事のルールから外れると元のルールには戻れない日本。定年後ならばと思っても、60歳の留学生を受け入れ対象とする中国の大学はみあたりません。埼玉県の山西大学奨学制度の募集要項を見たときに年齢制限の記載はありませんでした。60歳で大丈夫だろうかと応募するのをためらいましたが、長年の夢でもあった一度海外で生活してみたい、使える中国語を習得したいという思いが勝り、本奨学制度に応募しました。

留学生に選定されましたという通知を受け取ったときには驚くとともに、中国で生活できるという嬉しさがこみ上げてきました。結果通知を受け取った

後、継続雇用の退職願を会社に提出し、妻に正式報告、会社勤めではない第二の人生が回り始めました。

中国での 60 歳の位置づけ

中国でも 60 歳は人生一回り、意味がある年です。もともと日本が中国の暦を取り入れていたので当然です。(中国が日本に似ているのではなく、日本が中国に似ている。この感覚は後でも述べますが今回の留学で一番大きく感じたことかもしれません。)

中国の男性の定年は 60 歳。博物館、美術館、観光地のほぼすべての施設で 60 歳以上の入場は無料になります。無料にならなくてもロープウェイなど半額になるものも多いです。私が観光地で一番多く使った中国語は「我是六十岁以上的(私は 60 歳以上です)」という言葉だったかもしれません。

私が川口の日本語教室で知り合った 80 歳の中国のおばあさんは勉強意欲が旺盛でしたので、中国人だから日本人だからという個人の問題ではないのですが、社会的には、中国の 60 歳は人生のあがり、シニアとして悠々自適に暮らしてくださいという雰囲気を感じます。街では孫の学校の送り迎えや孫と公園で遊んでいるシニア層をよく見かけました。

教室に通って来る年配者

先生がおっしゃるには、あの毎日教室に来る老人は何なんだと警備の人が不思議に思って注目していたとか。老人とは私たち日本の留学生の事なのですが、先生方の間でも、60 歳で留学に来る学生は初めてだったようです。60 歳で勉強をしたいと思うことは素晴らしいと言われていました。

当事者である私は不思議と老人という意識はなく、楽しく学生生活を送ることができました。学生寮やクラスでは若い学生たちに「Shūshu(おじさん)」などと呼んでもらえて、相手側はわかりませんが、少なくともこちら側は違和感なく交流することができました。残念だったのは、スポーツ大会のようなものは参加する側ではなく観客側だった事でしょうか。まあ、若くても運動が得意ではない私は観客側だったかもしれませんが、学生っていいなあ、自分も学生の時に留学したかったと感じました。もし、学生の方でこのレポートを読んでもらう方がいれば、是非学生のうち留学をすることをお勧めします。

空気の乾燥と老い

一つだけ、老いを感じたと言え、空気の乾燥です。留学した山西省の空気は乾燥しています。夏は空気が乾燥していることで過ごしやすいのですが冬は、特に暖房の季節になると空気の乾燥が激しく、肌のうるおいを失います。日本にいるときには60歳はまだまだ若いと思っていましたが、山西省にいるとだんだん、梅干しのようにしぼんできて、自撮りした写真を見てあれ自分ってこんなにおじいさんだったかと思うようになってしまいました。気候や風土は人の見え方までも変えてしまう。実体験から得た学びです。

2. 留学期間の時代背景と反日

中国と日本の関係はつかず離れずですが、留学したタイミングの日中関係はあまりいい状況ではありませんでした。

2019年12月中国武漢でコロナウィルスが確認され、瞬く間に全世界に流行、気軽に中国に渡航できない状況になりました。山西大学奨学生もコロナウィルスの影響で現地留学はできず、オンラインでの留学が続いていました。私が参加する令和5年度も6月になってみないと現地留学ができるかわからないという状況でした。年が明け、中国ではロックダウンが解除され、中国ビザも徐々に申請可能になっていましたが、ビザ申請窓口は混んでおり、中国渡航が特別なものになっていました。航空券は日程FIXで取らないと安くなりませんが、ビザ申請が書類不備で再申請にならないか、直前のコロナウィルス検査で陽性にならないかなど日程に影響が出そうな心配ごとばかり。

出発直前8月24日、福島第一原発処理水放出。

福島第一原発処理水放出により、さらに日中関係が悪くなります。中国は日本産海産物全面輸入停止、中国から多数の抗議電話(いたずら電話)がかかってくるなどのニュース。そして、反スパイ法の日本人拘束。いま中国に行かない方がいいのではないかという友人の声を耳にしながら8月末中国に向け出発しました。実際、北京空港に降りてみるとメディアが伝えていたような反日的なものは一切感じず拍子抜けでしたが緊張の中での留学になりました。

反日について

中国で留学生活をはじめて半年間は反日のことなど忘れるぐらい平和な日常

でした。日本のメディアで取り上げているような反日的な雰囲気は少しも感じません。しかし、突然その時はやってきました。「日本人、我不买。(日本人、俺は売らない)」。大学に隣接する商店街の屋台でベトナムのクラスメイトが“肉夹馍(肉を挟んだパン)”を買っていました。「この店おいしいよ」と勧められ、私も一つと注文してお金を払う段になってお前も留学生かと聞かれたので日本人だと答えると「日本人, 我不买。(日本人、俺は売らない)」。と言って売ってくれません。それまで平和な日常が続いていたので、この出来事はショックでした。しかし、冷静に考えてみると日本でも外国人お断りの店は存在します。残念な出来事でしたが、これも実体験から得た海外で生活するという事の学びかもしれません。日本人には売らないと言われてからは、気軽に私は日本人だと言う事ができなくなりました。

中国の反日を過度に意識することも問題かと思いますが、中国では抗日の歴史は大変身近なものでした。中国の SNS 上では自称専門家のような人が多くの反日の動画を掲載し、東北地域の抗日の博物館に行かずとも各地の多くの博物館には抗日の歴史展示があります。留学した太原市の「晋商博物館」は、普通の商業の博物館だと思って行ったのに、多くのスペースで抗日の歴史が展示され、多くの親子連れの姿があり、歴史の勉強をしていました。中国でリーベン(日本)という言葉をよく聞くときはだいたい日本が悪いことをしたという歴史の説明です。9月18日の午前中には街中にサイレンが鳴ります。その時はなんのサイレンかわかりませんでした。あとで日本が中国で戦争を始めた「9.18 事変」の日だと分かりました。国の恥を忘れるな。

「勿忘国耻吾辈自强(国の恥を忘れるな、私たちは強くなる)」

東北瀋陽の九一八歴史博物館では、子供たちがこのスローガンをもって記念写真をとる姿が印象的でした。中国と関わる時、まったく歴史を知らない事は相手に対して失礼だと思います。ある程度の歴史と現在もその歴史が身近にあることを知った上で中国と向き合う必要があると感じます。

3. 中国が日本に似ているのか、日本が中国に似ているのか。

今回の留学では授業の内容にも興味がありました。中国の思想的なもの、政治的なものはどれだけ授業に影響しているのか。ところが実際授業を受けてみるとまったく現代中国の思想的なものを感じさせるものではありませんでした。語学留学生の語学レベルが低いので当然と言えば当然かもしれませんが、山西大学の大学生が受けている教養課程のカリキュラムを見ると、「马克思主义基本原理(マルクス主義)」「习近平新时代中国特色社会主义思想・・・」「军事理论(軍事理論)」など面白そうです。

語学留学生の教科書は、口語、総合、閲読の3教科。どれも掲載されている内容は興味深く面白いものでした。そして驚いたことは、教科書に出てくる随筆や物語は、一部の寓話を除き、あれ日本と同じだと感じるものが多かったことです。暦や歳時記、二十四節気、ものの感じ方や考え方など。でもよく考えると、中国が日本に似ているのではなく、日本が中国に(“昔の中国”に)似ているのだと感じるようになりました。少なくとも江戸時代までの日本は中国文化の影響を大きく受けています。暦や歳時記、二十四節気、儒教、文化、なにより漢字を使う国として考え方のベースが大変似ていると思います。

しかし、同時にこの教科書に書かれている日本に似ている中国は“昔の中国”なのではないかとも思いました。現在の発展した中国、競争的で合理的な中国と違うのではないかと。

教科書が作成されたのは初版2011年とか2012年とありますので作者が作成したのはもっと前からかもしれません。そして中に掲載されている随筆等はさらに古い1960年代から90年代。60歳の自分が懐かしい、似ていると感じるのも無理はないと思います。

中国はこの20年ですさまじい勢いで発展しました。また政治体制も代わってきたように思います。日本と似ていると感じた中国は“昔の中国”で、発展につれどんどんかけ離れていっている感じがします。いま、留学生向けに新しい教科書を作ったらどんな内容になるのだろう。一帯一路？

余談ですが、日本と中国は共通の価値観だと感じた矢先に裏切られたことを二つ。

中国は東洋ではない。

「中国も日本も東洋だからよく似ていますね」と発言した時に、先生に「中国は東洋ではありません。」ときっぱり言われてしまった。東洋とは日本の事。中国は中国。洋が付くものは海外だそうです。

中国の領土が一番広がったのは元王朝の時代。日本では元寇といえば鎌倉時代にモンゴル帝国（元朝）が日本を襲撃してきたと教わるが、元は中国の王朝だから、当時中国が一番大きかったという事らしいです。

4. 個人情報とケータイ社会

中国ビザの申請では、家族構成・連絡先、学歴、職歴、勤めていた会社の当時の上司の名前と会社連絡先など日本人からするとほぼすべての個人情報を求められる内容でした。中国の銀行口座を作るには日本のマイナンバーカードの番号も記載が必要だと言われ、飛行機はもちろん、高速鉄道に乗るにもパスポートが必要、ケータイの電子マネーも本人認証としてパスポートの紐づけが必要です。これらは外国人だという事ではなく中国の人々も ID カードが必須です。個人情報については中国と日本は明らかに考え方が違います。

最初は個人情報を取られることに躊躇していましたが、しばらくすると個人情報管理が崩壊してきます。そして、これからの電子社会ではこれが正しいのではないかとも思えてきました。

日本はマイナンバーカードでさえ導入がなかなか進みません。でも、デジタル技術で「社会や生活の形を変える」DXを進めるには、個人 ID ナンバー制や本人認証は避けては通れません。日本はこのままではどんどん時代遅れになってしまう。日本の知恵を結集してマイナンバーカードを中心とした個人情報管理が強力に推進する必要があると感じました。

最後に

留学生活の状況については、9月からの毎月のレポートに記載しましたのでこの最終レポートからは省きました。

1年間の中国留学という貴重な体験をさせていただき本当にありがとうございます。帰国した日本では以前に増して外国の方が増えた気がします。

今回の中国留学では、中国の方との交流はもちろんですが、インドネシア、ベトナム、韓国、タイなどのクラスメイト、寮で出会ったナイジェリア、パキスタン、アフガニスタンなどなど多くの国の方と交流できました。多くを語るわけではないですが、ちょっとした会話でも自分の殻がすこし溶けたような気がします。

一部のメディアやネットニュースが作り上げたイメージだけでその国を見ると見誤ってしまう。だからこそ、実際に現地に行ったり、その国の方と話したりすることがいかに大切であるかと感じます。そこには日本と同じように日常生活があり、誇りをもって生きている人々がいます。日本の外国人留学生受け入れに異を唱える人もいますが、相互の留学支援による国際交流は大変意味のあるものだと感じます。

10月からは埼玉県内にある日本語学校で日本語講師として働くことができそうです。今回の留学経験を今度は日本に来る外国の方を受け入れる立場として、これからの国際交流に活かしていきたいと思います。

ありがとうございました。

以上

写真 1.

留学生の出身地をみると中国の「一帯一路」が見えてくる。



写真 2.

中国の大学の新生は全員軍事訓練から始まる
自分としては、怖いと言うより逆に羨ましいと感じました。
自国を大事だと思う心は重要です。



写真 3. 山登りの帰りインドネシアの子たちと。



写真 4

60歳の留学生。第二の人生はここからです。



おわり